

理 事 長 所 信

2015年度(初年度)

一般社団法人 北名古屋青年会議所



初代 理事長
小 山 雅 也

【経 歴】（法人格省略）

2002年度	名古屋青年会議所		[入会]
2003年度	名古屋青年会議所	総務委員会	[委員]
2004年度	名古屋青年会議所	情報発信委員会	[委員]
2005年度	名古屋青年会議所	自然のしごと実践委員会	[副委員長]
2006年度	名古屋青年会議所	情報管理委員会	[委員]
同年度	愛知ブロック協議会	ブロックアカデミー委員会	[塾幹事]
2007年度	名古屋青年会議所	わんぱく相撲実践委員会	[委員]
同年度	日本青年会議所	サマーコンファレンス運営委員会	[副委員長]
2008年度	名古屋青年会議所	オリエンテーション特別委員会	[副委員長・塾長]
2009年度	名古屋青年会議所	全国会員大会推進特別委員会	[筆頭副委員長]
2010年度	名古屋青年会議所	格好良いNAGOYA 人育成委員会	[委員]
同年度	東海地区協議会	第37回JC青年の船「とうかい号」歓送迎委員会	[委員長]
同年度	愛知ブロック協議会	JC青年の船「とうかい号」特別委員会	[副委員長]
2011年度	名古屋青年会議所		[理事]
同年度	名古屋青年会議所	JC運動連携推進委員会	[委員長]
2012年度	名古屋青年会議所	渉外委員会	[アドバイザー]
同年度	日本青年会議所	LOMサービス実践委員会	[委員]
同年度	愛知ブロック協議会	ブロックアカデミー委員会	[委員長]
2013年度	名古屋青年会議所		[出向役員]
同年度	名古屋青年会議所	JCフェスティバル運営委員会	[アドバイザー]
同年度	東海地区協議会		[運営専務]
同年度	東海地区協議会	第40回JC青年の船「とうかい号」	[財務特別部長]
2014年度	名古屋青年会議所		[常任理事]
同年度	名古屋青年会議所	JCフォーラム運営特別委員会	[特別委員長]

理事長所信

一般社団法人北名古屋青年会議所

初代理事長 小山 雅也

『剛毅果断』

～ 此処に尊き青年会議所運動の礎を築く～

崇高な理念を掲げ滾る情熱をもった

意気溢れる青年が嚮導し

愛市精神が充溢する「地域住民主導型」の

明るい豊かなまちをいざ創らん

【序説】

100年前アメリカ・セントルイスの地にて、ヘンリー・ギッセンバイヤ・ジュニアというひとりの青年が青年会議所運動という希望の光を灯した。その輝かしい光は世界に綿々と著聞し、志を同じうする者と共に世界を明るく照らし始めたのである。その後1949年、未だ戦争の深い傷跡を残す我が国日本にもその光が差し、そこから65年という歳月をかけて、その運動は多くの民に伝播することで輝きを増し、一人ひとりの心を動かしながら時代の変遷と共に幾多の進化を遂げ、ついにこのまち「北名古屋」にその光は辿り着いた。

恒久不変な世界平和の確立に向けて、人々を奮い立たせるメッセージが現れる事を目指す至誠にして動かざるものは、未だこれ有らざるなり。

【はじめに】

「竟に諸侯恃むに足らず。公卿恃むに足らず、
草莽志士糾合義拳の他にはとても策これ無き事 …」

これは久坂玄瑞が武市瑞山(通称：武市半平太)に宛てた言葉であり、後に坂本龍馬に託したものである。先の読めない国際情勢の中、多様化する様々な価値観から生じた逕庭する情報により、混迷を深める現代日本が必要としているものこそ、正に名も無き”草莽の志士”一人ひとりの力なのである。

便利さと豊かさを履き違えた弊害による価値観の多様化、個人主義、自己責任という聞こえの良い言葉の裏に潜む怠慢な利己主義や刹那主義、これらによって、古来の日本人の精神性とも言うべき“当たり前”の事を当たり前にする”ということにすら違和感を覚える感覚を起こさせる根源は、無責任と無関心に他ならない。平然の繰り返しがいつしか当然となり感謝する気持ちを失わせ、正しいことを正しいと言うことさえ躊躇しなければならない現代において、日本人が永きに渡り築き上げてきた高尚な風土が蝕まれてきている危機感を感じるべきなのである。

そして、有数の伝統や歴史を誇りに感じる気持ちを今一度見つめ直すと共に奪還し、日本文化を重んじることの重要性を知覚した上で、この危機的状況を打破できるものこそ、何時の時代においても幾多の困難を乗り越え次代を切り開いてきた青年の他にないのだと、青年自身が理解することが大切なのである。

さらに、我々一人ひとりがこれまでの自分を振り返りつつ、これからの自分を考え、まずは自らを律すると共に、創始の精神に遡及し、恒久的に荘厳な理念のもと壮大な理想を求め続けなければならない。

また、変革の能動者として地域の中心的役割を担うべく、「誠実なる思いの正しき行動が未来を開くのだ」という想いの無限の可能性を信じ、明確な指針を標榜することが必要なのである。

つまり、未来志向の地域住民主導型の希望溢れるまちを創造するために、滾る情熱を持った意気溢れる青年が嚮導し、地域住民の琴線に触れる真摯な運動を展開し実践躬行することに専心しなければならないのである。

【礎を築く】

私は北名古屋生まれでもなければ、北名古屋市民でもない。ましてや愛知県出身でもない。今から20年前、祖父、父親共に教職員であった公務員の家

庭から生まれた私は、たったひとりでこの地域（まち）に来て大学の在学中に二十歳で会社を興した。人脈も資金も頼るものは何一つない環境下において、不安と闘いながらも夢だけを信じ、形振り構わず死に物狂いで這いずり回り、朝も昼も夜も必死に働いた。その結果、皆様のお陰で現在は複数の会社を経営するまでに成長させていただき、設立20周年を迎えようとしている。

改めて自らの人生を振り返るにあたり、自分のことだけを考えて突っ走っていた私が、人としての本質や人として何が大切であるのかに気づくことができたのも、“自分が”“自分だけが”という考え方から“世のため人のために”という思考へ軌道修正することができたのも、青年会議所との出会いがあったからだと言っても過言ではない。

青年会議所に入会以来、公益社団法人日本青年会議所本会、東海地区協議会、愛知ブロック協議会、そして公益社団法人名古屋青年会議所に於いて十余年という歳月に渡り、数々の役目役割を与えていただいたことにより体得した知識と経験、そしてJAYCEEとしての気概と覚悟をもった核心が私にはある。

今、此処に芽生え得る萌芽は、紛うかた無き青年会議所であり、目的もなく集う諸会合でもなければ、其処に住まう者のみで形成される形式的な集いでも奉仕活動団体でもない。他に類のない独立自尊の思想と哲学を有する伝統と実績ある唯一無二の国際機関であり、世界最大の青年組織なのである。

我々はその会員即ちJAYCEEであるということに自覚と責任を持ち、自らが能動的に行動し、意気揚々と振舞い自信をもって共に活動しなければならないのである。同時に崇高な理念を掲げた運動を推し進めていくにあたり、ただ“伝える”のではなく、“伝わる”ということに目的意識の照準を合わせていくことが大事なのである。

万が一、揶揄するものと直面し得る時も、決して横流するのではなく、帰属意識を存分に発揮し、運動の正しき理解を求めべく、人間が生まれつき持っているところの良心や道理を遵守し、当為当然の責任ある行動に心がけていただきたいと冀う。

青年会議所を理解していくにあたり、まずは大きな特性の一つとしてあげられるのが単年度制である。これは成就に全勢力を注ぎ決して途中で投げ出し、曖昧のまま翌年度に持ち越しはしないという決意の表れなのである。

勿論その根底を為す志や精神はこの地の将来を見据え、単年度で潰えることなく連続していくことは言うまでもない。即ち不連続の連続なのである。

【組織づくり】

日本最大の青年の運動を展開すべく一翼として、この地域に著聞し運動を根付かせることが担いであるからには、決して摩擦を恐れてはいけない。新たなものが生まれし時には、必ず大なり小なりの摩擦が生じるものであり、その中でそれを恐れず貫いたもののみが本物となり既存と成り得るのである。

創立元年にしかできないことがある。

我々チャーターメンバーにしかできないことがある。

本年度が千載一遇の契機であるということを今一度認識し、我々がどう想い、どう動くかでまだ見ぬ後世が大きく変動するのだという責任と自覚をもって、明るい未来を見据えた礎の土壌形成に最大限注力すべきである。

そして、その成果と共に運動を昇華させ、より良い形で次代に継承することまでが責務なのである。その為には、まず強固な組織作りに従事し、更にはその組織力を高めていかなければならない。

「組織力」とは、物事を着実に遂行していく力、即ち「遂行力」と、環境の変化に対応し得る適応力とも言うべき「戦略力」を掛け合わせたものであると考える。

しかしながら組織とは有機体ではなく、ひとの集合体であるということに鑑みると、その担い手は決して型に当てはめられた育成でのみ形成されるべきものではない。大切なことは、活動する人が直接的あるいは間接的に知覚し、動機づけ、そして行動へと繋げるといった一連の特性を持った組織風土なのである。決して明文化されるべきではなく普遍的なもの、つまり共有の行動様式とも言える無形物無単位物を尊ぶべきなのだ。

勿論、規則や形式は必要であり、公益性を重視し地域に認めていただき必要とされる団体と成ることは必要不可欠である。

我々は政治家でもなければ役人でもなく、ましてや聖人君子でもない、全てを規則に則り杓子定規に進める事のみを最重視するが故に、先輩諸兄への感謝は元より、人情や義理の希薄化が浮き彫りになってはいけないのである。

何事に臨んでも、それが道理に合っているか否かを考えて、その上で何が正しくて、何が間違いなのかを判断し行動することが必要なのである。

だからこそ人が兼ね備えている義や情を尊重する組織でありたいと切に願う。

【組織増強】

組織では至るところで「期待を超える」動きが沸き起こってくるべきである。それは其処に属する一人ひとりの小さな行動様式の拡がりから生まれる。全体にとっては小さく見える個々人のレベルでの多岐にわたる拡がり組織全体で積み上がっていくことにより、「組織力」を高めていくことができる。

組織ではリーダーが存在し、それらがお互いに連携をとりながら組織全体を主導していくことが重要であり、そのリーダーが期待を超える働きをし、まわりの人を巻き込み育てながら物事を成し遂げ、組織の「遂行能力」を支えていくことが必要なのである。

また常に論理（ロジック）というレンズを通して物事を理解し、周囲に耳を傾けることにより、組織の滞在的な「戦略能力」を常に養っていくべきではないだろうか。

今、我々にとって必要不可欠なことは増と強の両輪から形成される会員の拡大であり、“ひとつづくり”なのである。そしてその礎を築くにあたり、創立時こそ最高度に発揮せしむべきものである。

【自分づくり】

地域市民の意識を変革することのできる人材育成をするには、まず己の意識を奮い立たせると同時に自己研鑽に努め、意義目的を稔りと理解した上で能動的に行動するJAYCEEとして、凜然たる姿勢を以って市民を魅了することが必要なのである。

“「個」から「公」へ、「子どもの為に」から「子どもたちの為に」へ”という考え方を基調とし、まずは慈悲喜捨の教えを遂行することが大切なのではないだろうか。

〈慈悲喜捨の冥想〉

慈・・・「慈愛」、相手の幸福を望む友情の心。

悲・・・「抜苦」、苦しみを除いてあげたいと思う憐憫の心。

喜・・・「隨喜」、相手の幸福を共に喜ぶ心。

捨・・・「淨捨」、相手に対する平静で落ち着いた心。

これは釈尊の根本的教えであり、四無量心とも呼ばれ、他の生命に対し自他怨親なく平等で、過度の心配などのない静粛な精神状態を示し、四十業処の一部であり四梵住若しくは四梵行ともいわれている。

自と他を区別する心ではなく、自と他は二つではないと実感する心を育み、動物も植物も大地も他人も私も、すべてはひとつになって生きていると思う心が大切なのである。“自分が”“自分だけが”と思っている間違っただけの心を冥想によって消していくべきなのである。

それを鑑みるに、まずは全ての事柄を自分事に置き換え「私が」という主語を「このまちが」「この国が」「世界が」にするだけで、自ずと些細なりとも己の魂に変革を齎すことができるのではないだろうか。

つまり「自と他は同一」なのである。

【ひとつづくり】

青年会議所運動で大切なことは自分の目標の根幹を綱領に置き、日常から駈りとした理念をもって生きていくことである。

我々の掲げる「明るい豊かな社会の実現」に向け、各々の地域から変革を興し、その変革を周りに伝播することのできる使命感をもった誇り高き地域のリーダーを育成すると言う事こそが青年会議所の本懐であると私は考える。

そのためには、身の丈以上の修練を積み、このまちへの奉仕の精神を培い、志を同じうする者と切磋琢磨する事で友情を育んで行く事が必要なのである。

青年会議所は青年の学び舎ともいべき自己成長の最高の土壌であり、真摯に「学ぶ」ことにより、得た知識、経験を英知に変え、具体的に未来を描く力を鍛えることで明確な目的を理解し、正しい判断力と力強い実行力を発揮することができる「主導力」を涵養する機宜となるのである。

青年会議所が永きに渡り必要とされている所以は、実に思想や哲学が着実に実践されてきたからに他ならない。この時代を担う青年経済人として為すべきことは、他の誰かではなく自らが責任世代であると自覚することから始め、青年会議所というひとつづくり団体を有効且つ最大限に活用し、地域に寄与すると共に人格形成に従事することである。

そして旅立ちの後、地域に戻り地域の行末を担うべく、勇気ある発言と責任ある行動と横溢する使命感を兼ね備えた信倚される主導者として、各々の地域（まち）を牽引し、希望溢れる明るい豊かなまちを創造することこそが、この世に生を受けた本質であると考えている。

また我々が、市民・行政・企業を有機的に連係させる媒介的な立場であるな

らば、地域に根ざした運動を愚直に清々しく展開し「生き抜く力」と「生かされていることへの感謝」が漲る社会の創造を目指し、我々が掲げる「明るい豊かな社会」を推進すべき立場であることに何の疑いもない。

主導者は現れるのではなく、明確なビジョンを持ち、それを実現しようとする高い志を持った凜然たる人材を育成していくものである。

【まちづくり】

まちづくりとは、単に地域社会に存在する資源を基礎として、「生活の質の向上」を実現するための一連の持続的な活動のことだけを指すのではなく、永い歳月により培われる継続的な創造活動なのではないだろうか。

ほんの少しの意識変革で世界は変わると、私は心から信じて止まない。

今よりもほんの少し自分自身の意識が変わり、ほんの少し他人をおもいやり、ほんの少し今よりも素直に愛情を示し、ほんの少し各々が寛容になれば、意外に簡単に世界は変わる。

平成の大合併により旧師勝町と旧西春町との合併で誕生した北名古屋市は、地理的に豊かであり、人口も増加し続けている反面、合併による地域の温度差や愛市精神の希薄化などの問題もあるが、堅牢な徳性を有する人々の集うこのまちは、一見して特に大きな問題も不満もなく暮らしているように伺える。

しかしながら、その先にある希望を見て歩まなければ衰退は避けられないと考えている。現状維持とは衰退を意味し、不満がないとは希望がないと同異義語であると解き、問題意識の改革こそが早急に取り組むべき課題である。

この地域が地形の有利さに恵まれているという利点も、決してそれだけで将来に渡って変わることなく安心できる要素であると思うのではなく、この地域の利の良さに加え産学官民すべての協和が得られて初めて地形の有利さも自然の条件も役に立つのである。それ故にこのまちの将来を論ずるにあたり、まず産学官民の協和を図らねばならないのである。

まずは課題を検証した上で、このまちの歴史や背景、これまでの経緯を熟知し、それを知識として学び、さらにはその解決策を英知として生み出すことが重要なのである。

そして先駆けの団体として、我々が市民に対してその英知を、また正しき運動を実行することで発信し、市民の意識を変革へと導くことによって、市民が主体的にまちづくりに参画し、自己責任、自己決定によって合意形成する能力を高める取り組み、所謂“キャパシティ・ビルディング”を構築していくことが極めて重要となってくる。

さらに、我々が主導的仲介役の担い手となり、産学官民全ての自立と共助の確立がこのまちの青年に与えられた使命であると捉え、幾多の困難にも怯むことなく積極果敢に立ち向かうべきである。

また、まちの魅力を創出すると共に、行政や各諸団体と綿密な連携を推し進め、常に持続可能な解決策を提供し続け、地域住民主導型のまちづくりを展開していくことが重要なのである。

市民一人ひとりがまちに関心を持ち実際に関わるのが大事であり、共に伝統や文化、風土に存在する本質を探究することで、万物の本能の営みを実現する社会（まち）を目指し青き志を以って愛する地域の共創に寄与していこう。

そして、先人より受け継いだ「現在」という大切なお預かりものを昇華させ、次代へお送りする責務があることを認識した上で、その後、社会（まち）を構成する市民（ひと）の意識を変革することができたのであれば、10年後、20年後、またその先の将来が眩いばかりに現れ、その時この社会（まち）は「人」「まち」に自信と誇りを持った人々が暮らす、住み易く活気溢れるまちの創造を可能にし、さらには日本経済の発展と世界平和の実現に資するものであると信じている。

【おわりに】～継承～

転換期とも云われる混沌とした時代、我々青年は未来への架け橋を担う責任世代として、滾る情熱を持った意気溢れる若き力を遺憾なく発揮し、幾多の苦難を乗り越え更なる指針を標榜する我が国の正しき発展に寄与する事ができる唯一の力なのである。

そのことを常に念頭に置き、先人から受け継いだこの社会（まち）をより良いカタチで次代に引き渡すべく、道徳に基づいた思慮ある実行と自らの知性と徳性の研鑽に努め、青年としての重責を全うすべく進取果敢に邁進し、明るい豊かな社会の実現、そして恒久的な世界平和の実現を企図するべきである。

そして敢然たる想いで、覚悟をもった無二の同志と共に未知の可能性を切り開くべく、確固たる信念と言う盾を身に纏い、決して振れる事のない志操堅固な信条という言う矛を有し、剛毅果断を胸に気概と覚悟を以って新たなる歴史を共に歩んで行こう。

明日為すは、一生為さずと等しき

我せずして、他するもの無し

【あとがき】 - 概要 -

■日本青年会議所とは

1949年、明るい豊かな社会の実現を理想とし、責任感と情熱をもった青年有志による東京青年商工会議所（商工会議所法制定にともない青年会議所と改名）設立から、日本の青年会議所（JC）運動は始まりました。

共に向上し合い、社会に貢献しようという理念のもとに各地に次々と青年会議所が誕生し、1951年には全国的運営の総合調整機関として日本青年会議所（日本JC）が設けられました。現在、日本全国に青年会議所があり、「修練」「奉仕」「友情」の三つの信条のもと、よりよい社会づくりをめざし、ボランティアや行政改革等の社会的課題に積極的に取り組んでおり、さらには、国際青年会議所（JCI）のメンバーとして各国の青年会議所と連携し、世界を舞台として、さまざまな活動を展開しています。

■青年会議所の特性

青年会議所には、品格ある青年であれば、個人の意志によって入会できますが、20歳から40歳までという年齢制限を設けています。これは青年会議所が、青年の真摯な情熱を結集し社会貢献することを目的に組織された青年のための団体だからです。会員は40歳を超えると現役を退かなくてはなりません。この年齢制限は青年会議所最大の特性であり、常に組織を若々しく保ち、果敢な行動力の源泉となっています。各青年会議所の理事長をはじめ、すべての任期は1年に限られます。会員は1年ごとにさまざまな役職を経験することで、豊富な実践経験を積むことができ、自己修練の成果を個々の活動にフィードバックさせていくことができます。青年会議所におけるさまざまな実践トレーニングを経験した活動分野は幅広く、OBも含め各界で社会に貢献しています。たとえば国会議員をはじめ、知事、市長、地方議員などの人材を輩出、日本のリーダーとして活躍中です。

■国際青年会議所（JCI）について

自由な社会と経済発展を実現し、新しい社会をリードするにふさわしい人材育成を目的として、1915年にアメリカ・ミズーリ州セントルイスに生まれた小さな青年活動グループから始まったJC運動は、その活動が認められ、アメリカの社会的活動を担う主要な青年団体へと発展していきました。1944年には「積極的な変革を創り出すのに必要な指導者としての力量、社会的責任、友情を培う機会を若い人々に提供することにより、地球社会の進歩発展に資すること」を使命に、アメリカをはじめ8カ国によって国際青年会議所（JCI）が発足。その後、年々加盟国は増え、日本も1951年に加盟、JCIの一員として新たな活動の一步を踏み出しました。会員数17万人以上の世界で最も大きな青年団体です。現役メンバーに加え約250万人以上ものOBがいます。毎年11月には世界会議が開催され、世界中のメンバーが一堂に会する重要な国際交流の場となっています。

